

宗教用語集

2022年5月9日 月曜日

以下の文章は3人称形式である。以下では、彼（教祖）は宗教用語を「便宜的に」提示する。彼はこの種の用語に対する認識や定義を変更するだろう。

物質と意識（蟲）と運転手（ヌシ）

物質は物質である。または、物質とは、エネルギーを持つ対象である。物質は物理学の対象である。経験的には、物質は機械的であり、自動的に運動する。一般的には、物質は知覚される。

意識（蟲）は視界や聴覚の感覚や味覚や痛覚である。宗教的な用語では、彼は意識を蟲と呼ぶ。彼は蟲という単語を漫画蟲師から拝借した。視界は物質できない。おそらく、意識は物質それ自体でない。思考の規範では、もし視界が存在するならば、脳が存在する。これは経験的である。睡眠中は視界は存在しないが、脳は存在する。意識は質量やエネルギーや色や形を持たない。意識は存在や状態を持つが、意識それ自体は運動しているのかは不明である。意識の位置も不明である。また、目の色が異なるとき、視界それ自体も異なる。なお、彼は彼自身の意識を把握することができるが、他者の意識を把握することができない。ただし、意識はエネルギーを持たないので、何が（運転手が？）意識を把握しているのかは不明である。

運転手（ヌシ）は意識を捉える何かである。宗教的な用語では、彼は運転手をヌシと呼ぶ。彼はその単語を神道に関係した山のヌシや川のヌシのヌシから拝借した。運転手それ自体は物質や意識でない。思考の規範では、もし運転手が存在するならば、意識が存在する。これは怪しい。意識と同様に、運転手は質量やエネルギーや色や形を持たない。運転手は存在を持つが、状態や運動を持つのかは不明である。この宗教では、彼は運転手を自己と決定する。動物の運転手とサピエンスの運転手は互いに異なるのかは不明である。彼は自己の運転手を知覚しないが、何か実際に存在すると感じ取っている。彼は運転手を知覚することができない。また、彼は運転手を認識しているのか、その存在が実際であると信仰しているのか不明である。もし認識が物質や知覚に依存するならば、彼は運転手を認識していない。彼は他者の運転手を感じ取ることができない。

対応と分岐

運転手が意識に対応して、意識が物質に対応しているのかは不明である。運転手が意識から分岐して、意識が物質から分岐しているのかは不明である。ただ、彼が分岐と解釈する時、意識は物質から分岐した対象であり、運転手は意識から分岐した対象であると捉えることができる。対応の場合、意識とは、物質に～に対応する対象であるという文が生じる。

また、彼が分岐を使用するならば、彼は善悪の正当化を分岐で実行することができる。対応だと、彼はそれを実行することが難しい。このため、彼は分岐を使用した。さらに、彼が分岐を対応に置き換えるとき、この宗教の目的が対応になる。彼はその単語に違和感を覚えるので、彼は分岐を使用する。

彼の認識は次である。意識は物質でないが、物質を基盤として物質でないものが生じている。同様に、運転手は物質でも意識でもないが、物質や意識を基盤として物質でも意識でもないものが生じている。彼はこの認識を対応でなく、分岐で捉えた方がより彼の認識に近いと感じた。だから、彼は分岐という単語を使用した。対応の場合、ある対象が同じ種類の対象に対応しているという印象がある。もし対応が意識と物質の間に使用されるならば、意識と物質は同じ種類の何かであるべきである。彼はそのように認識しないので、彼は対応でなく分岐を使用した。ただ、もし彼が分岐よりも適切な単語（動詞？）を発見するならば、彼はその単語を使用するだろう。

知覚と認識と信仰

彼は物質を自動的に知覚する。彼はある対象を彼自身の子供であると認識する。彼はある物質を知覚して、彼はその物質を彼自身の子供と認識する。痴呆老人は彼自身の子供を知覚するが、その物質を彼自身の子供と認識しない。誰が大和民族であるのかはある宗教系統の人間の認識に依存する。何が性的嫌がらせであるのかも宗教系統の人間の認識に依存する。

信仰には、次の2つの意味がある。一番目には、ある対象が実際に存在する、またはある対象が実際的であると感じる、または把握することである。例えば、彼は運転手を知覚しないが、彼は運転手を実際的であると感じる（把握する）ので、彼は運転手を信仰する。二番目には、ある現象が実現すると感じることである。この宗教では、彼は彼の運転手の復活が実現するだろうと感じる。だから、彼は彼の運転手の復活を信仰する。

神と創造主

神とは、ある主体が崇拝する対象である。ある対象を崇拝するとは、その対象の存在と状態と運動が善であると判断することである。口語的には、ある対象を崇拝するとは、その対象の存在と状態と運動が正しいと感じることである。

一方、**創造主**とは、ある対象を創造した対象である。例えば、自然界の創造主は自然界を創造した。仏教では、釈迦は神であるが、創造主でない。一方、ユダヤ教やイスラム教では、ヤハウェやアッラーは創造主であり、かつ唯一の神である。一神教とは、神の数が一つである。言い換えると、一神教とは、崇拝対象の数が一つである。なお、この宗教では、教祖が宗教というシステムの創造主であり、かつ唯一の神である。

宗教

彼は宗教を「自己の社会システム」それ自体と認識する。一般的には、大和民族は宗教を信仰者を救済するものや修行して悟りを開くもの、または願いを叶える何かと感じている。しかし、その種の偏見は宗教に対する一つの見方である。「俺らについて」では、彼は宗教を運動競技システムや人間競技システムと認識して、そう決定する。

その他の誤認識として、宗教は世の中のあり方を説明する何かであると感じられているように見える。たとえ人々が自然界の全てを明らかにするとしても、彼らは男女平等が善であることが正し

いのか、つまり善悪の問題を解決することができないだろう。より日常的には、人々が正しい性規範すら明らかにすることができない。なぜなら、善悪も性規範も自然界の中には存在しない。

当然であるが、もし人々が自己の善悪や自己の性規範や富の規範を持たないならば、彼らは自己のまともな社会を形成することができない。「俺らについて」では、彼（教祖）は唯一の正当化された善悪と性規範、その他の規範を信仰者に授ける。そして、信仰者は自己の社会システムを形成して、異教徒や異文明と文明的な劣等感を覚えずに対峙することができるようにする。

理論と実践

「俺らについて」には、理論と実践がある。彼（教祖）は理論家に似ている。信仰者が理論の実践を実行する。理論は理論物理に似ていて、実践は実験物理に似ている。科学は理論と実験の二つからなっているように、「俺らについて」も理論と実践の二つからなる。信仰者（の前駆体）は理論を学習して、実践する。この時、信仰者（の前駆体）は信仰者になる。より正確には、創造主階級が理論（システム）を創造する。統治者階級がその理論を学習して、民の統治のために使用して、信仰者を正当に統治する。さらに、平民階級が理論を学習して、主体的に実践する。

真理

真理とは、唯一の正当性である。異なる言い方では、真理とは、唯一に正当化された善悪である。大和民族は真理を自然界の正確な表現であると感じているように見える。しかし、「俺らについて」では、真理は自然界には存在しない何かである。だから、たとえ人々が自然界の全てを明らかにするとしても、彼らは真理を獲得することができない。

例えば、男女平等が善であるのか、男女公平が善であるのかは自然界の中には存在しない。だから、たとえ彼らが自然界を調べるとしても、彼らは男女平等が善であると結論づけることができない。これはどんな性規範が善である（正しい）のか、どんな子育てが正解であるのかにも関係する。

宗教的には、創造主の目的が善悪を唯一に正当化する。上記の例では、男女平等が正しいのはキリストがそう言ったからである。言い換えると、イエス・キリストが男女平等である世界を目的としたので、男女平等が唯一に善である。彼は創造主であり、彼は世界をそのように創造した。だから、その状態が善であり、その善が唯一に正当化される。「俺らについて」では、彼も目的が善を正当化して、その目的が真理である。